
REDMAN

buburo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REDMAN

【Nコード】

N4447H

【作者名】

buburo

【あらすじ】

面白いかどうかは分かりませんが読んでみてくださいw。

第1話「オヤジの発明品。」

〈第1話〉

「なんでだよ……。オヤジ……。なんで死んじゃったんだよ・
・。」

この少年、赤田・要一12歳。たった今ある事件にまきこまれた。
7月中旬、夏休みの最中に……。

〈1週間前。〉

「おい……。オヤジ……。」要一は呆れ顔でオヤジを呼ぶ。

「ほら！。見ろ！！。できたぞ！！。要一！！。」オヤジは要一の
言葉も聞かずに、うれしそうに
うきうきしている。

「だからさ……。オヤジ……。」

「うわー！。すごいぞ！。こりゃ！！。ノーベル賞もんだぜ！！。」

「あのさ……。オヤジ……。こんなヘンテコ靴で何が出来んの？。」

「

「ん？。これか？。この

「ハイパーサターンミラクルレボリューションミラクルスニーカー」
はな・・

何と！！。この靴を履いて、このスイッチを押すだけで……。」

「何だよ。その長い名前。しかも、ミラクルって二回言ってるじゃ
ねえか！！。」と、鋭いツッコミ
を入れ、

「あのな。毎回こんな変な発明品でノーベル賞だの、なんだの取れないの!!。」要一は

ダメダメ発明家のオヤジに毎度のようにダメだしをした。

「で?。今日来る2、3年に1回のオヤジの発明品が欲しいっていうお客さんいつ来るの?。」

「なんだよ。2、3年に一回で・・・1年に1回は来とるわ!!。まっ、まあいい・・・。」

えっと、たしか、後2時間くらいで来るぞ。」

「ふーん・・・。じゃっ、俺はこんなちゃんけな発明所じゃなくて、家に戻ってるわ。」

「ああ。」

この言葉がオヤジと僕が最後に喋った一言だった。

次回へ続く。)

第2話「救急車。」

「第2話「救急車。」」

そして、あの後、俺は一旦、家に戻った。その直後の事だった。

「うああああ!!。」

オヤジの悲鳴が聞こえたので、何事かと思い、発明所へすぐに向かった。

「オツ、オヤジ!!。」その場で見たものはオヤジが血まみれになっている姿だった。

「よっ、……。要一……。」虫の息でオヤジは苦しそうにつぶやいている。

「オヤジ!!。しゃっ、喋んな!!。死ぬのが速くなるって聞いたことがある!!。とにかく、

救急車をはやっ……。」

「シュキンッ!!!!。」近くで刀を抜く音が聞こえた。

「なっ……。!。」要一は驚いて後ろを振り向いた。

そこにはジャンパーを着た左目に眼帯をした男が刀を持って立っていた。この男がオヤジを刺したのだらう。

「おい。小僧。勝手なまねしてんじゃねぞ。救急車なんか呼んだらお前ら二人とも仲良く天国だ。」

眼帯男が言う。

「くっ……。!。」要一は、仕方なく救急車を呼ぶのを諦めた。

「くそ……。救急車呼べなきゃオヤジが死んじゃう……。その前にまずはこいつ誰なんだ?。」

何のために呼ばせないんだ?。」要一は心の中でつぶやいた。

「まっ、オヤジが死ぬのを待つしかねえな。小僧。へっ、こんな変なガラクタしか作れねえやつのため

によく救急車を呼ぶ気になるな。」そう言った瞬間、要一は思いついた。

オヤジを助ける方法を。

「第3話に続く。」

第3話「オヤジの死。」

第3話

「オヤジの死。」

「さあて、どうすつかな。このポンコツ機械。」眼帯男はガラクタを見る眼でオヤジの発明品を見て言った。

「なあ、眼帯のおっさん。何が目的でオヤジを刺したんだ?。」俺はオヤジを助けたい思いを抑え、冷静になっっているような言い方で言った。

「・・・、お前、さっきまですごい焦ってたのに今はなんでそんな冷静なんだ?。・・・」

まあ、いい・・・。それで?、何で刺したかってか?。それはな、ある人にお前のオヤジを

殺せつて頼まれたんだよ。「この言葉からも眼帯男は殺し屋らしい。

「へえ・・・。誰がそんな事を?。」俺は正直、そんな事はどうでも良かった。しかし、

オヤジを助けるためにはこの男を油断させる必要があったからだ。

「ふん。そこまでは言えねえな。何でお前のオヤジを殺すのを頼まれたつてのはとにかく

その人がお前のオヤジを憎んでたんじゃねえのか?。」眼帯男が言い終わった瞬間だった。

俺は、眼帯男に隠れて履こうとしていた

「ハイパーサターンミラクルレボリューションミラクルスニーカー」を履き終わった。

この靴はどんな性能が分からなかったが、今使える物はこれしかなく、一か八かだった。

もしかしたら逃げ出せるようにジェットでも付いているかもしれない。

それならオヤジを連れて逃げ出せる。という考えもあり、こうしてみただ。

「よっ……よう……い……ち……」そんな事を思っていた時、オヤジの声がした。

「オッ、オヤジ！。だから、喋んな！！。」俺は感情がむき出しになっってしまった。

「よ……う……い……ち……も……う……い……い……、おれは……もう……し……」

その瞬間、頭が真っ白になった。オヤジの鼓動が止まってしまった。「オヤジーーーーー！！！！。」俺はものすごい大声で叫んだ。

オヤジが死んでしまった。俺のせいで。そんな事を頭の中で何度も考えていた。

しかし、ずっとそうもいられない。

「おい。やっぱオヤジが死んで悲しかったのか。小僧。ふん……じゃあな……。俺の仕事は

もう終わった。」眼帯男は後ろを向いて歩き出そうとした。

「ギュイン……。ギュイン……。ギュイン！！！！。」

すごい動作音が鳴り始めた。

そう、ハイパーサターンミラクルレボリユーションミラクルスニーカーの動作音である。俺は

考える前に言葉に出た。

「おい……。おっさん……。逃げんなよ……。……来い！！！！。」

俺の周りは赤色の何かに包まれていた。

（第4話に続く。）

第4話「佐山栄治」

第4話

「佐山栄治。」

「赤い……オーラ……?。」要一は何がなんだか分からない。

しかし、このスニーカー、見た目からなにか履いた後の方が強そうだ。

なぜかという、まず、この赤いオーラ。そして、なんと、要一はスニーカーにあるスイッチを押すこと

により、空が飛べるのだ。スニーカーの底にジェット機が付いているわけでもなんでも無い。

しかし、なぜか宙に浮いている。これがこのスニーカーの一番すごい所だ。

「おつ、お前……まさか……!。」眼帯男は、スニーカーを履いた要一を見て驚いた。

「課羅句利<カラクリ>使いか!?。」眼帯男が驚きを隠せずに声を発する。

「……からくり使い……?……。」要一は何の事かさっぱり分からない。

眼帯男はこれまでの態度がうそのように

「……そうか……。お前みたいな小僧は本当はどうでも

いいんだが……。仕方ない……。……おい……

小僧……。」眼帯男は、

小さい声で言った。そして、眼帯男は刀を抜き、何かのスイッチを押した。

「ウーン……。ウーン……。ウーン!。」眼帯男の刀からも要一のスニーカーのような

動作音が聞こえてきた。

「なんだ……。おっさん……。アンタもこのスニーカーみたいなものを持ってたのか……。」

「……でも、そっちの方が俺も、アンタと対等の力で正々堂々オヤジの仇を討てるよ……。」

スニーカーを履いた後の要一はなぜか物静かだった。これもスニーカーが関係しているのだろう。

「へっ……。課羅句利を使ってる状態の俺にそんな口を叩けるのも今の内だ……。！」

「……。それと、最期に俺の名前を聞かせてやる……。俺の名は……。」

「佐山栄治」。

眼帯男が自分の名を明かした。

「……。俺の名は……。」

「赤田要一」。

「と、すかさず要一も名を言った。そうして、要一と栄治の戦いが始まったのである。」

「次回に続く。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4447h/>

REDMAN

2011年1月20日15時46分発行